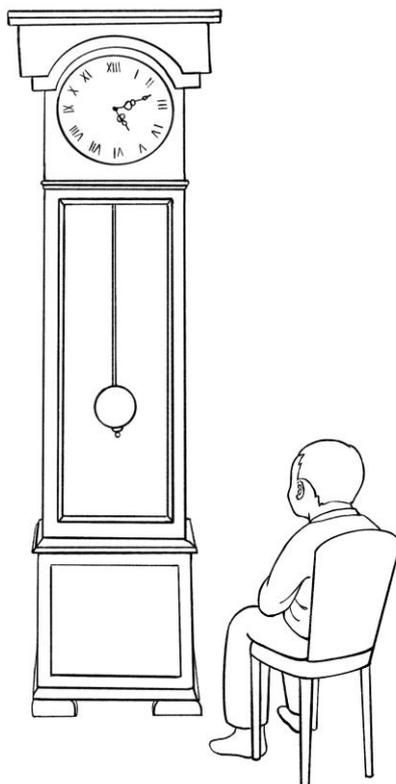


名曲シリーズ：ある男と時計の物語



Sasaki Akino

(Drawn by Akino SASAKI)

これは、ある男と時計の物語です。



その男の前には、大きな時計がありました。

とても大きな時計で、棚に置くにはちょっと大きすぎました。ですから、床の

上に直接置かれていました。それでも、時間を確認したいとき、ほとんどの人は時計を見上げなければなりません。それくらい大きな時計でした。

男は、この大きな時計をととても気に入っていました。なぜなら、その時計は男が生まれた日の朝に、両親が買ってきたものだからです。つまり、今からちょうど90年前に、この時計が男の家にやってきたこととなります。

今、90歳の男は時計の前に立っています。時計を見つめていると、いろいろな昔の思い出が男の頭の中に浮かんで消えていきます。まだ子供だったころ、男の目から見た時計は、今よりも、もっと大きく見えました。背の高い青年に成長したあとでも、自分よりも高い時計は、男の自慢の時計でした。勉強やスポーツで失敗して、自信を失いそうになったとき、男はいつもこの時計のことを思い出し、心をなぐさめました。

そして、あの日のこと、そう、人生で一番幸せだったあの日のことも思い出します。それはずっと好きだった人と結婚することができた日です。

教会で結婚式を終えたあと、男は自分の妻となった女の手を取って、この家に戻ってきました。ドアを開けて中に入ったとき、時計は鐘をちょうど24回鳴らしました。それは二人にとって、一番の祝福となりました。

あの日からもう数十年。妻と一緒に作り上げた暖かい家庭は、子どもが増えて

にぎやかになり、今では孫もいます。しかし、男の隣には妻の姿はありません。

今、この広い家で、男は静かに時計を見つめています。男はふと、この時計が自分にとって最も忠実な部下だったことに気がつきます。毎日休まず働き続け、文句一つ言いません。男がこの時計にしてやらなければならないことはたった一つ、週に1度、前の扉を開けて、中にあるネジを回してやることだけです。それだけで、この時計はずっと休まずに働き続けてくれるのです。

とは言っても、この時計も年を取りました。最近では鐘が壊れてしまったのか、しばらく前から音を出すことはなくなっていました。今は静かで、大きな時計です。

男は時計を見つめながら、小さな声で言いました。「ありがとう・・・。」

それが、男にとって人生の最後の言葉になりました。その日の夜遅く、男は静かに息をひきとりました。とても静かな最期でした。でも、同じ家に住む家族、息子夫婦や孫たちははっきり聞きました。時計の鐘が真夜中に一回だけ鳴ったのです。それまで壊れてしまって鳴らなかった鐘が、たった一回だけ、鳴ったのです。

その鐘の音を聞いた孫は思いました。

「ああ、大好きだったおじいさんは、本当に旅立ってしまったんだ。もう会えなくなってしまったんだ。」

